

講談名作文庫 13

荒木又右衛門

昭和51年4月10日第1刷発行

昭和51年4月20日第2刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112 振替 東京3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

編集 講談社出版研究所

印刷 廣濟堂印刷株式会社

製本 株式会社若林製本

Printed in Japan ©KODANSHA 1976

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

荒木又右衛門



講談社

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。

〈編集部〉

目次

小便小僧、肝 きも つ玉が小せえぞ……………	九
雑巾 ぞうきん 踊りの槍術先生……………	一五
免許 めんきょ 皆 かい 伝 でん 、恩師の形見……………	二
首がなくてはまんまが食えねえ……………	二六
情けは人のためならず……………	三四
亭主、拙者は一文なしだ……………	四三
よー、ハンサムのお侍……………	四九
どっこい、お父上お危のうござる……………	五五
ガンと一発、父親からの肱鉄砲……………	五五
見ん事はずれた越中 えちゅう ふんどし……………	七二
道場開きに秘めた念願……………	七九

抜く手も見せぬ手の内……………	八四
柳生家からのお呼び出し……………	九〇
首が飛ぶかも知れぬぞっ……………	九五
独壇場の奉書試合……………	九九
早桶をかついでの出迎え……………	一〇五
超スピードのゴールイン……………	一二二
馬の耳に念仏、平ちやらでござる……………	一二九
一刀のもとに恩人をバツサリ……………	一二五
ちんコロ大名に驚くな……………	一三三
あわや天下の一大事……………	一四〇
知恵伊豆、苦心の死諫問答……………	一四八
天下のために捨てる命……………	一五五
数馬 かずま っ、助太刀なぞは真っ平じゃ……………	一六二
心底見えた、呼び戻せ……………	一六八

その手は桑名くわなの焼き蛤はまぐり……………一七五

槍は蟬せみさし、弓はたんぼのかかし流……………一八一

甚左、甚ス、サイザンス……………一九〇

転んでもただは起きない甚左衛門……………一九八

三十六計どろんの法……………二〇一

万策ばんさくつきて窮余きううよの一計……………二一〇

おお、ミステークミステーク……………二一九

総揚げそうあげ総花の大尽あそび……………二二九

遊女のながす誠の涙……………二三六

鬼玄丹とは猫のようなやつ……………二四三

故知にならった燈台下暗しの計……………二五〇

泥棒どろぼうならぬ逃げ棒だ……………二五七

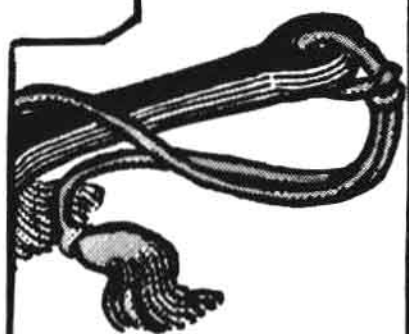
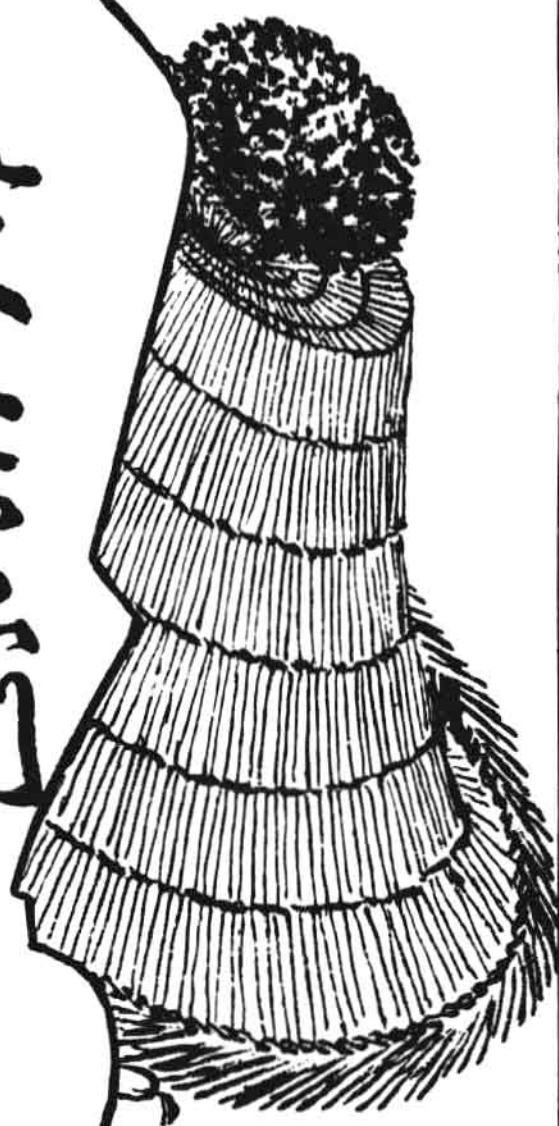
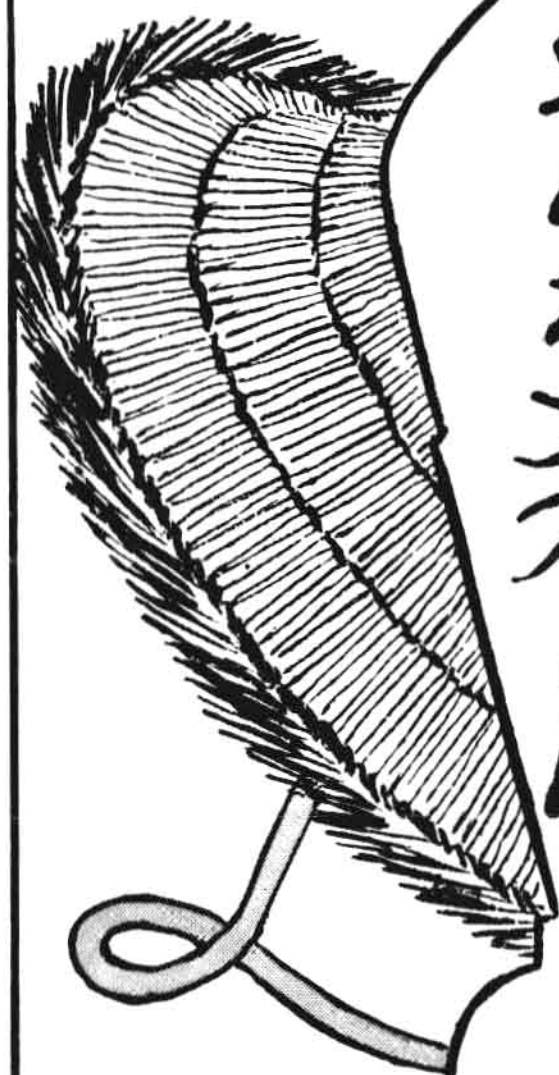
晴れて出で立つ仇討あだうちの旅……………二六三

兄妹、因果のお小ぐるま……………二七〇

矢田の献策、流言の計……………	二七七
大津の宿の伊賀越え評定……………	二八五
袋の中のねずみ戦術……………	二九三
はて珍妙の馬ぞろえ……………	三〇二
ほまれ三十六番斬り……………	三〇八

さし絵 井川洗厓

荒木又右衛門



小便小僧肝っ玉が小せえぞ

天下の名人、荒木又右衛門先生の伝記を申しあげます。

昔から敵討ちもたくさんございますが、なかでもつとも有名なのが三つ、一に富士、二に鷹の羽の打ち違い、三に上野で花ぞ散らせると申して、一に富士というのは建久四年、富士のすそ野において、曾我十郎五郎の兄弟が、春風秋雨十八年、千辛万苦のその末に、工藤左衛門祐経の狩り屋へしのび入り、親の敵を討ったのが第一。

二に鷹の羽の打ち違いというのは、浅野内匠頭切腹ののち、四十余名の浪士の面々、元禄十五年十二月十四日、松のこずえに降り残る雪のあかりを味方のたいまつ、本所松坂町吉良の屋敷へ乱入なし、上野介を討ち取ったのが第二、鷹の羽の打ち違いは、すなわち浅野家の定紋で、赤穂義士の仇討ち。

三に上野で花ぞ散らせるといふのは、ここに申しあげます荒木又右衛門源吉村が、義弟渡辺数馬の助太刀をいたし、三十六人の剣士を相手にして、伊賀の上野鍵屋が辻において、しゅうと、渡辺靱負の仇討ちをとげたという、この三つをもつて、天下の三大仇討ちといたします。

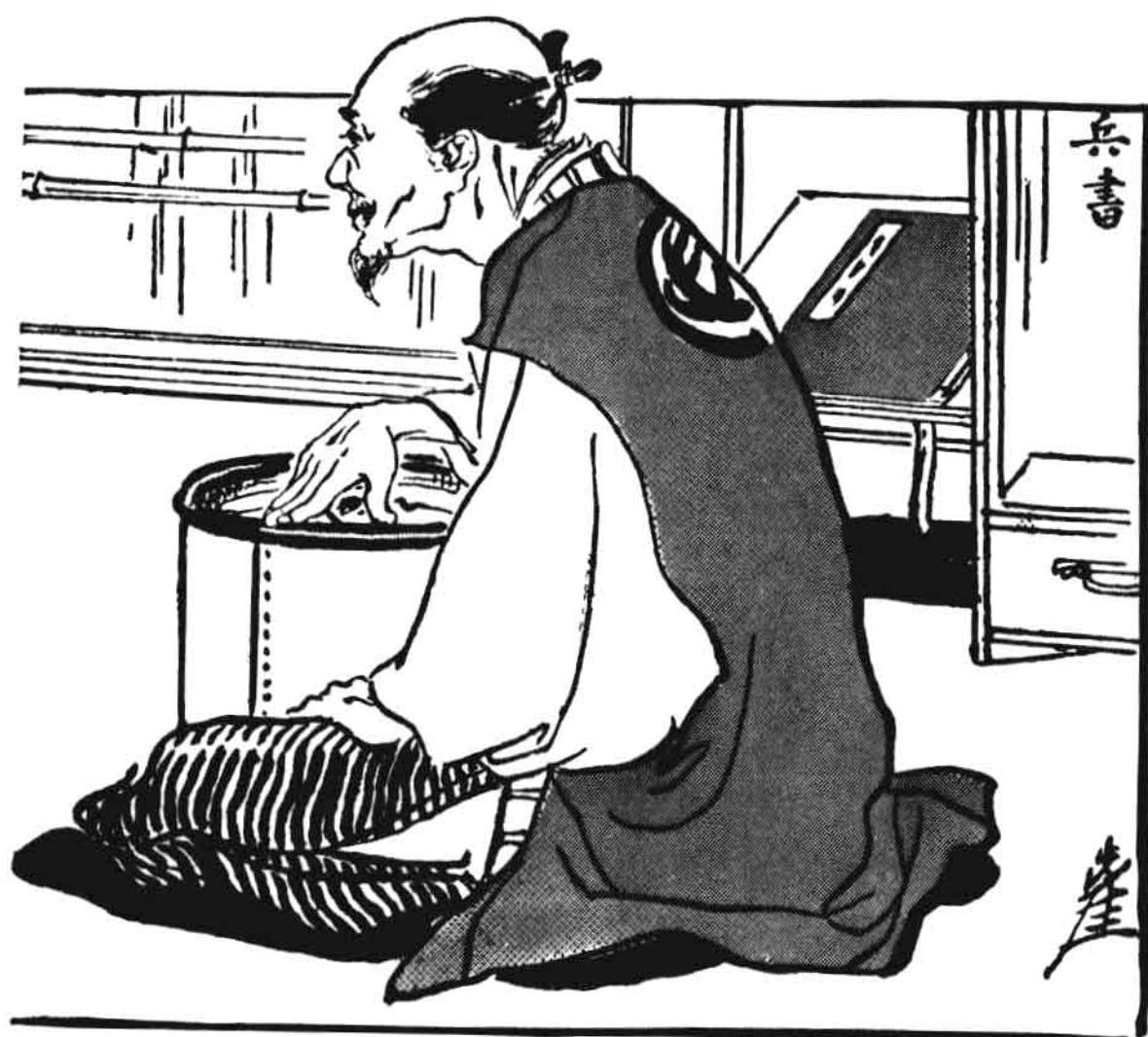
この荒木又右衛門という人は、天下の大名人といわれた、柳生十兵衛三厳先生の門人、一万三千余人の門人のうちより選まれて、柳生流の極意をさずけられた人、幼名を丑之助と申し、荒木

摂津守村重せつのかみむらしげの後胤こういん。父は荒木彦太夫といつて、伊賀国山田郡いがのくにやまだごおり、荒木村の郷士でございます。

ところがこの丑之助、生まれたとき「オギヤア」という産声うぶこえをあげたきり、泣いたことがないという不思議な子供、しかも驚くばかりの力持ち。三つ四つになりますと、並みの子供の六つ七つくらいに見えます。その上、どんなことがあっても、怒りもしなければ、びくともしない、始終にこにこ笑っているという変わりよう。

父の彦太夫も、頼もしいやら心配やら、

彦「大男、総身そうみに知恵がまわりかね、というが、丑之助ちとイカレポンチかな。しかしおっとりはしているが、物覚えもよく聞きわけのあるところなど、尋常一様でないようにも見えるが……」



と心配したり喜んだり、これが親心でございます。

さて、丑之助こうして十歳のときのこと、山向こうの隣村に祭りがございまして、源之助という友だちと二人、この祭りにいったが、つい面白さに遊びほうけて、帰ろうとするといつか日暮れ時、

源「おい、丑之助、山越えの近道を帰ろう」

丑「いや、山越えは近ごろ、山賊や人さらいが出るというから、本道にしようよ」

源「なんだ、山賊がさんぞくこわいのか、武士の子がそんなことでどうする」

源之助、肩ひじ怒らしてずんずん行くから、丑之助もだまってついて行くと、山の中ほどで日はとっぷりと暮れ、十日とおかの月が木の



間^まがくれにさしています。と、見ると、大きな松の根元に、グーツグーツと大いびきをかいて寝ている怪しげな大男。

源「やあ、いたいた、あれが山賊に違いない。よし、一つ驚かしてやろう」

源之助、いきなり前をまくったかと思うと、シャーッと大雨を降らせはじめた、乱暴な子供もあつたものです。大男は驚いてはね起きてみると、子供が二人、平気な顔をして立っているから、

男「これこれ、いたずらなやつだ、おまえたちはおれをなんだと思う」

源「山賊だろう」

男「うむ、いかにも山賊だが怖くはないか」

源「ああ、この丑之助が、山賊が怖いから本道にしようといったが、私は怖くないといって、やって来たのだ」

男「うむ、面白いやつだ。どれ、おれもいっしよにゆこうかな」

ぬーっと立ちあがったのを見ると、身のたけ六尺あまりの大男。ウーンと一つ伸びをしてから、そのりのそり、二人といっしよに歩きだしました。さあこうなると源之助、はじめは強がっていたが、だんだん気味が悪くなってきた。そこで空元氣^{から}をだして大声に、源之助、朗詠^{ろうえい}かなにかをやろうとしますが、がたがた、ぶるぶる、どうしても歌えません。

すると今度は大男、丑之助に歌うようにすすめる。丑之助、平素父から教えられた唐詩選^{とうしせん}の一節、

洛陽城東^{らくやうじやうとう}、桃李^{とうり}の花、飛びきたり飛び去って誰^たが家にか落つ……
と詠^{うた}いでしたが、朗々として声にいささかの淀みもない。大男すっかり感心して、

男「おまえは強がらないが、いい肝っ玉だ、行くすえ名をあげる、りっぱな侍になるだろう。それに引きかえてこっちの小便小僧、ちとこの丑之助というを見ならえよ。おれはここで別れるぞ」

といてわき道へ入って行った。そのことがいつか村中へ知れわたって、荒木の丑之助は末頼もしい少年よ、といわれるようになりました。その後、丑之助十一歳のときから、父の碁の友だちである、山田幸兵衛という剣士のところへ、剣術を習いにゆくことになりました。

この山田幸兵衛という人は以前は紀州の藩士、故あって荒木村に浪居しておりましたところの、神道流の達人。丑之助はこの幸兵衛について、三年のあいだ学びました。ところが、丑之助十三歳のとき、幸兵衛が彦太夫にむかい、

幸「丑之助殿は、すえすえ恐るべき達人名人と、いわるほどの者になるに相違ない。もはや未熟な山田幸兵衛の手にはおえ申さぬ。この上はさらによき師について、十分の修行をなされるよう……」

という話、父の彦太夫も、丑之助には望みをかけておりますから、丑之助を膝ちかくよんで、彦「丑之助、師のお言葉もあるが、そちはこれから日本中を修行にまわるか、それともだれかよき師があったら、それへ内弟子となって教えを受けるか、おまえの考えはどうだ」

丑「はい、私が剣術を覚えましたのは、山田先生のおかげで、そのご恩は決して忘れませぬが、まだまだこれでは、武をもって立つというまでにはまいりませぬ。私は武芸者になるからは、日本一の武芸者になりたいと存じます」

彦「はあ、偉いことをいうな、日本一の武芸者になれるか」

丑「ええ、きつとなつてみせます。けれども武芸というものは、十八般というくらいで、剣術だけではございませぬ。弓術、馬術、槍術または体術などにも、わたらなければなりませぬ。よつて私は、剣術のかたわら、槍をも稽古したいと存じます」

彦「それは結構なことだ。しかし、この近所には、槍術の先生があるまい」

丑「奈良の宝蔵院覚禅坊胤栄先生は、偉いお方と聞いておりますが、お父上、ご存じではございませぬか」

といわれて気がついた彦太夫、はたと膝を打って、

彦「そうであつたな。覚禅坊先生のあることを忘れていた。なるほどよいところへ気がついた。それではさつそく宝蔵院へゆくがよい。幸い覚禅坊先生は、わしの古い知り合いだ、わしが書面をつけてやろう」

丑「どうかお願い申します」

梅檀は嫩より芳し。もうこの時からして、又右衛門は天下の武芸者の上に出ようという気概をもつておりました。そこで父からいとまをもらつて、伊賀国荒木村を立ちいでまして、ただ一人大和国奈良へやつてまいりました。

そのころ南都猿沢の池の片ほとりに、宝蔵院覚禅坊胤栄という、出家ではあるが、恐ろしい槍の名人がありました。この人もと武芸の神といわれた上泉伊勢守秀綱から、剣術を学んだ人でございですが、後たまたま奈良の宝蔵院へ来て、大膳大夫盛忠という達人から槍術を学び、後に自身で一派を編みだし、これを宝蔵院流となづけましたが、さらに猿沢の池水にうつる三日月の影にヒントを得まして、片鎌槍というのを発明したあっぱれ達人、その風をしたつて全国から集ま

る門人、千余人という大繁盛だいはんじょうでございます。

雑巾踊りの槍術先生ぞうきん

するとある日のこと、この宝蔵院の玄関で、

○「お頼み申す、お頼み申します」

という声。弟子の一人が出てみますと、旅姿の子供が一人立っている。

弟「おや、子供だな。なんだ、おまえは」

子「私は、伊賀国山田郡荒木村よりまいりました、荒木丑之助と申す者でございます」

弟「大そう遠くから来たな。修学旅行に来て迷子にでもなったか」

丑「いいえ、迷子じゃありません。こちらは覚禅坊胤栄先生の道場でしょう」

弟「そうだ」

丑「私はその胤栄先生に、お弟子にしていただこうと思って伺いました」

弟「なんだと……弟子になりたい。ばかなことをいうな。おまえのような子供が、ここのお弟子になんぞなれるものか。先生に突きとばされたら、一ぺんで三笠山みかさやまを飛びこえて、月の表面まですつとんでしまうわ」

丑「おじさんそんなことをいって、ほら吹きクレーのような大風呂敷おおふうしきは、今どきはやりません